

1.お香の歴史

～飛鳥時代	538年 仏教伝来 ※諸説あり 595年 日本で最も古いお香の記述『日本書紀』
～奈良時代	鑑真 <small>がんじん</small> の来日 仏教で使用される供香（そなえこう）が一般的 香＝宗教（仏教）の意味合いが強い。
～平安時代	香料を複雑に練り合わせた「薫物」 <small>たきもの</small> が貴族の生活の中に浸透。
～鎌倉・室町時代	武士が台頭 鎌倉時代は禅宗が広まる。香木そのものが人気に。
～江戸時代	貴族、武士階級のほかに経済力を持った町人にも香文化が広がる。
現在	現在の暮らしに合った、様々な新しい香りが開発されている。



① 日本最古のお香の記述

538年に日本に仏教伝来したころに仏教儀礼としての供香が大陸から伝えられました。（※諸説あり）
『日本書紀』では595年に日本で最も古いお香の記述を見ることができます。
それが推古天皇三年の夏四月に書かれています。推古天皇三年が595年にあたります。

三年夏四月、沈水、漂着於淡路嶋、其大一圍。嶋人、不知沈水、以交薪焼於竈。其烟氣遠薫、
則異以獻之。

【読み】『三年の夏うづき四月に沈水、淡路嶋あわじのしまに漂着れり。
其の大きさ一圍ひといだき。嶋人、沈水しまびとということを知らずして、
薪かに交かまどて竈たに焼く。その烟氣けぶり、遠く薫る。
即すなわち異けなりとして、獻たてまつる。』

【意味】「淡路嶋に、沈水が漂着した。其の大きさはひといだき。嶋人は、沈水ということを知らなかつたので、薪と一緒に竈で使ってしまった。煙があまりにも遠くまで香ったので、不思議だと思って、朝廷に献上した。」

ここで出てくる沈水というのが、香木のことです。日本書紀によると、漂着したのは淡路島のような。「沈水」と表記されているように、上質な香木ほど比重が重く、水に沈むとされていたので相当な時間をかけて淡路島に漂着したようです。

② 渡来のための準備リスト

その後、飛鳥時代は主に仏前を清め、邪気を払う供香が用いられるようになり、宗教的な意味合いが強いものになっていきます。その後、鑑真和上の来日により、「香薬」や「香の配合」という専門的知識が日本に伝えられました。このころから仏のための供香だけでなく、貴族たちの居住区間で香を薫く習慣が生まれました。

『唐大和上東征伝』（鑑真和上の日本への渡航記録）

麝香甘剤、沈香、甲香、甘松香、竜腦香、胆唐香、安息香、棧香、零凌香、青木香、薫陸香、

都有六百斤

これは、「唐大和上東征伝（とうだいわじょうとういでん）」に書かれている、鑑真和上が2回目の渡航準備の際に用意した物のリストの一部です。麝香や沈香をはじめ、様々な香料の名前が連なっています。

最後に六百斤とありますが、「斤」が単位です。今だと食パンの単位としてのイメージがありますが、元々重さを表す単位として使用されています。この史料からは当時、お香の重さの単位としても使われていたことが分かります。一斤は約六百グラム。それが六百もあるとなると、相当数があるのが分かりますね。この時の渡来は失敗していますので、実際にこれらが日本に来たわけではありません。ですが、これだけの香に関するものが当時、渡来の際に必要なだと考えられたのではないのでしょうか。

③ 平安時代～そして現代へ

平安時代になると、貴族の住居に香を薫く習慣を「空(そら)薫(だき)」と呼び、仏の香と区別して薫物が用いられました。また、衣服に香をたきしめるなどの香を愉しむといった嗜み方が仏教で使用される香とは違ってきます。

武士が台頭する鎌倉時代や室町時代は大陸との交易(日宋貿易)を通じて中国から様々な文献がもたらされました。その中には質のいい香木もあり、一本の沈香の香りを聞くことが武士の間で流行しました。

その後、戦国武将らが台頭してくると千利休などの名だたる茶人が香の世界でも名を残しています。また、戦国武将らも教養や嗜みとしての香が重要な意味を持っていました。

江戸時代になると新しい組香が生まれ、優れた工芸品が作られたことにより、大名たちは豪華な香道具をそろえるようになりました。一方、町衆の間でも「お線香」がたかれるようになりました。1700年代には遊戯の香が「道」として確立されていきました。「香道」が誕生したのです。

明治維新後には急激な西洋化により、欧米人の和文化の発見とも相まって、日本の伝統文化の見直しの機運が高まり、茶や香は「芸道」として大成されることとなりました。

現在は本物の豊かさや日本人のアイデンティティーを求め始め、香が人々の暮らしや感性を豊かにするものと位置づけられています。

